

OMC事務局 〒560-0085 豊中市上新田4-16-1-33 合原一夫 TEL06-6833-9227
広報編集局 〒573-1171 枚方市三栗1-18-20 前田茂夫 TEL072-850-5781
<http://www.ne.jp/asahi/smaeda/12/>

平成18年1月(2006年) No.481

新年ご挨拶

みんな元気で明るい年でありますように

会長 合原一夫

あけましておめでとうございます。昨年は大地震や水害、JR事故等の暗いニュースに加えて耐震偽装などという前代未聞の出来事がマスコミを賑わせました。一方映像界ではハイビジョンカメラが入手し易い価格で世に出たせいか、わがOMCもハイビジョンに取り組む”勇気ある”会員が増えて例会もいまや4対3の通常作品にくらべ、ワイド派とハイビジョン派が本数の点で上回るという事態になってまいりました。新しい技術に積極的に取り組んでおられる会員諸氏に敬意を表したいと思います。

今年の映像フェスティバルでは、いよいよハイビジョン作品の登場かとプロジェクターの準備ができるか今から気になるうれしい課題です。

ともあれ、会員諸氏の平均年齢も毎年確実に上がってきています。若い人が入ってこないという現実はどう対処してよいのか、或いはビデオカメラをお持ちの多くの若き女性たちに、ビデオ作品づくりの楽しさをどう伝えていけばよいのか、新しいテーマであります。まあ、とにかく私たち自身が今年も元気で明るく、それに楽しく、一日一日を大切に充実した日々を送るのがまず大事かと思えます。若さを保つ意味からもビデオの趣味は素晴らしいですね。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

全国コンテスト入賞おめでとうございます

☆第5回彩の国埼玉映像コンテスト 審査員特別賞「帰郷」藤原純三氏

1月例会は1月15日(日曜)13時より開催

1月例会は総会と新年会を行う関係で日曜日の昼間の例会となります。場所はいつもの通り難波市民学習センター(JR難波O-CATビル4階)と新年会はすぐ上の階のスーパードライ難波です。どうぞ作品をお持ちになってお集まりください。年会費未納の方は8千円を会計へどうぞ。新年会費は5千円を会場にて受け付けます。ハガキで出席申し込みの方、止むなく欠席の場合は早めにご連絡願います。

ハイビジョン用デッキ が準備できました

ハイビジョン作品が増えてきましたが、出品者は自分で再生用のカメラを持参して上映していました。このほど会員の黒田さんがソニーの業務用ハイビジョン再生デッキを預かりという形で提供してくださいました。OVCでも使用しますので、有村世話役が借りておられたロッカーを4月からOVCと共用という形で借り収納します。

これからハイビジョンで作品をつくれる方は作品テープだけをお持ちください。黒田会員に感謝します。

■今年の一泊撮影会あまるべは餘部鉄橋と漁村に

今年の撮影会は6月3～4日(土日)、兵庫県の餘部鉄橋をメインに近くの漁港などで計画しています。餘部鉄橋はやがて造り替えるそうです。雪の季節をと考えましたが、坂道で滑って事故でもおきたら大変だと例年通り初夏にしました。詳細が決まりましたら、またお知らせします。

■師走の雪

12月には珍しく雪が積もりました。例会で見せていただくのが楽しみです。

12月例会のレポート

このところめっきり冷え込む師走例会ですが、例会への会員諸氏の出席もよく、定刻には出るべく人の顔も出揃いました。イブの夜も会員諸氏には昔話のようです。

今月の司会は安居氏、書記、関氏、機材、江村、増池、河合の3氏、受付、奥、渡辺両氏、以上の各担当で進行しました。

■出席者：有村、岩井、江村、岡本、上総、奥、紙本、河合、黒田、合原、進藤、西村、関、秦、華岡、藤原、鉄具、前田、増池、松本、宮崎、森口、森、森下、安居、山本、吉岡、渡辺の28氏(敬称略)。

■上映作品(今月の講評は関幹事です)

1. 神戸南京町

増池 茂さん 7分05秒

師走の18日に撮り、それを編集して例会に持ってきたという早業。だから軽やかなと思ったが、さにあらず。たいへん内容の充実した作品。寒波が来た日曜日だが、

それでも中華街は若者たちでいっぱい。立ちのぼる白い湯気。その軒先で熱々の肉まん、麺類を黙々と食べる若い女性たち。ユーモラスな光景の中でその日の寒さを見事に描いていた。作者のカメラ・アイ、つまり対象の狙い方は回を重ねるごとに秀逸さを増してきたが、いつも構成のどこかが抜け落ちるクセがあった。この作品はその欠点がなくほぼ完璧。

人物のアップねらいは確かに効果がある。だがそのために題名「南京町」の全体像がぼやけてしまった。それに食べるシーンがすこし多すぎたきらいがある。強いて難を言えばその二点か。

2. 飛鳥2005

有村 博さん 9分35秒

かつて酒船石も鬼の雪隠・俎も亀石も、8ミリフィルムを回していた頃は草深い丘の斜面にひっそり佇んでいた。そして多くの映像作家たち自らがその時代に溶け込んだかのように作品の中で古代ロマンを歌い上げたものだった。いまは道も舗装され遺跡も鉄柵や鎖で囲われ、すぐ近くまで住宅が迫っている。どこかを掘り起こせば、見なければ損とばかり、にわか考古学ファンが大挙して押し寄せる情報化社会に飛鳥も例外なく巻き込まれている現実。作者もそこらを意識したか、名づけた題名にも飛鳥ロマンは消え失せていた。

3. 歴史のまち米子

吉岡貞夫さん 8分40秒

商店街の駄菓子屋さん。軒先に掲げた大きな一銭玉の看板に昭和一桁生まれの人たちは郷愁をそそられたのではないか。学校から帰ると母親から一銭をもらって家から駆け出した我が身の子供の頃を懐かしく思い浮べた。見るからに頑丈な石垣が残る米子城址。なんと明治維新後の廃藩で民間に払い下げられ、城の建物はすべて解体して薪にしたと言う。いまではありえないことがその時代はまかり通ったのだと驚いた。

出張の業務が早く終わった日、駅前の案内所で入手した資料を参考に市内の要所を撮影して回ったとか。それも半端ではない。一泊ならともかく、もし日帰りでこれだけの量をこなしたのであれば、作者は並み外れた行動力の持ち主だ。

4. 京都歳時記 秋

紙本 勝さん 9分50秒

シリーズ最終版。お盆の行事に始まり、時代祭、鞍馬の火祭り、嵐山のもみじまつり、そして鴨川の流れて締め括っていた。とくに夜の行事、あだし野念仏寺の千灯供養は無数の無縁仏の前で蠟燭の灯がゆらめく幻想の世界。一心に手をあわせる少女の姿が印象に残った。対照的に鞍馬の火祭りは、裸の男たちが巨大な松明を担いで練り歩く勇壮な祭。火の粉が舞い、紅蓮の炎が夜空を焦がす迫力の映像。

京都にかぎらず近ごろの祭や行事はいつでも何処でも人がいっぱいだが、作者の映像を見るとそんな障害は感じさせない。綿密な下調べとひたむきな努力の積み重ねがこのような優れた映像を生み出すのだろう。

5. 晩秋の青海省

山本正夢さん 7分40秒

毎回めったに見られない辺境地の珍しい風物を楽しく拝見している。新疆ウイグル自治区、甘肅省、四川省などは日本からのツアーも多いが、それらの地方に囲まれた青海省は観光資源が乏しいのか旅行案内もほとんど目にする事はない。

住民の多くはチベット族らしく、タール寺というチベット寺院のまへの道路で五体投地をする人の姿があった。どうやらこの寺院を中心に人々のいとなみがあるらしい。街から一步外に出るとそこは茫茫とした草原と、海かと思ふ青海湖。場所が移って農民の脱穀風景になるが、石のローラーを引き回すのは昔のまま。変わったのは動力の牛が車になったぐらい。毎年二桁の経済成長を謳歌する北京・上海の人々とのその格差。中国はおもしろい国だなと思った。

6. 紀州弁慶踊り

岡本至弘さん 10分00秒

衣裳は時代に合わせているようだがポップス調の音楽に舞台の上で男女が軽快に踊る。両手に鳴子を持てばそのままよさこい踊りになるのではないか。まあそのような夜の舞台だった。熊博の成功と熊野古道が世界遺産に登録されたのがきっかけに脚光を浴びるようになった田辺市がにわか創りあげたイベントだろう。紀州と弁慶との係わりは、あとから作者の言葉で初めて知

ったが作品にその説明は出てこない。そして踊りの後半はなぜかマツケンサンバ。

7. 秋彩の鞍馬をゆく(ワイド)

森口吉正さん 8分48秒

錦織りをちりばめたような色鮮やかな麓から、鞍馬寺境内を経て木の根道まで。いつもの解りやすいナレーションとともに正確な構図で切り取った映像がラストまで続く。さきの名水シリーズも然り、紀行ものではもう完成された第一人者に違いない。だが作者の作品は正直いって書記泣かせ。つまり欠点が見当たらないから書きようがないのだ。しかし安心して見ていられると言うことを裏返せば、あまり変化がない。パターンがいつも決まっていることにつながる。完全無欠の作品でありながら、どこかもの足りない思いで見ている者が居ることをぜひ知っていただきたい。

8. 剣山の夜明け(ワイド)

河合源七郎さん 6分34秒

雲間から朝日の昇るシーンがこの作品の見せどころ。ダイナミックな音楽をバックに、昇る太陽に見惚れ感動していたら突然か細い笛の音「越天楽」に変わった。ここがまさに疑問点。それは作者と同じ山小屋で過ごした二人の女性の、朝日に感謝の念を込めた篠笛の合奏、それもずいぶん後になってその説明が出てきた。その間、例会に居並ぶ人はみな「なぜ?」「これはなに?」と思ったに違いない。偶然に撮れたとは言え、この作品の中では絶妙のアクセントになっている重要なショット。しかしそれを出すタイミングを間違えた。朝の空は時間とともに刻々と色が変わるから撮影順にしかつなげないと考えたかも知れないが色の違いはビデオフィルターで自由に加工できるはず。できたら前後を入れ替えてほしい。当然ながら音声も。

9. 夜さ来い(ワイド)

江村一郎さん 6分40秒

「アートウェイブ流、古典モダニズム」なるほど納得。とにかくすごい。和装をこれだけ豪華にすればずいぶん費用もかさむだろうに。もちろん来年はデザインも変えた新しい衣裳だから、これは今回限り。終ったあとどうするんだろう…と余計なことを考えた。それはともかく、いまは何処も

かしこもよさこい踊りだが、やっぱり本場はなにかが違う。グループの多さ、グループごとの人数、先導車の大音響、色とりどりのライトアップか。それに作者の撮り方も年ごとに変わってきた。どうしたら撮れるのかと不思議に思うほどの超々アップ。もうよさこいはだれが行っても及ばない作者の独壇場の感がある。次はハイビジョンで…。当然でしょうね。

10. わがまち元気市民パレード (ワイド)

進藤信男さん 11分50秒

消防隊や警察隊も出演していたと思うが、箕面の中学高校にこんな多くのブラスバンドチームがあるとは驚きだ。チアリーダーの演技も冴えていた。よく行列を作品にするのは難しいと言うが、12分あまりを結構もたせたのではないか。ブラスバンドが過ぎたあたりから最後のよさこいが出てくるまで4:3をワイドに延ばしたところがあったが、やっぱり不自然。来年取り直してまた見せていただきたい。

11. 吉野 (ワイド)

鉄具嘉夫さん 7分17秒

副題に「万葉集を歩く」とある。花の吉野山から象(きさ)の小川と呼ぶせせらぎに沿って歩き、万葉人の歌を載せている。せっかくのナレーションだが、話し方が早口で声が低くその内容がよく判らない。同時に出るテロップも字が小さく、白字にふちなしは背景に溶け込む部分もあってたいへん読みにくい。万葉に詳しい人ならこれで充分だろうが、私のような知識のない凡人にはちょっと難しかった。例会のスクリーンでは気付かなかったが、書記の仕事のために私が録画した画面はタイトルやテロップが出るところ、エフェクトで処理した場面がノーマルになっていた。撮影はワイドでも編集時に16:9に設定しないとこうした結果になるので以後ご注意を。

12. 瀧坂道の秋 (ワイド)

秦 峰一さん 8分48秒

長いあいだ柳生街道を歩いていないが、昔と少しも変わらない風景に安心した。歩く人の姿もまばら。石畳の上に紅葉がさらさらと舞が落ちるさまも、小川の中の石に流されまいとしがみつくと可憐なもみじの葉がいかに秋らしい情緒を演出している。

この街道は比較的石仏が多いが、有名な朝日観音、夕日観音のもう少し引いたアップがあっても良いかなと思う。全般にロング調で無難にまとめているが、その分やや物足りなさを感じた。

13. 餘部鉄橋 (参考作品・ハイビジョン)

江村一郎さん 2分30秒

6月の第1土曜日曜に予定している撮影会のテーマのひとつ。長さ311メートル、地上41メートル高さはトレスル鉄道橋では日本一と言うが、突風による列車転落事故をきっかけに掛け替えが決まり、近い将来解体されることになっている。鉄道好きの人はこの鉄橋だけでも作品にするのは可能だが、二駅城崎寄り(列車で10分)の香住で漁港の水揚げやせり市も撮影を行なう予定。費用など詳細は後日ニュース等でお知らせする。

14. 初冬の伏見稻荷散策 (ハイビジョン)

奥 宏さん 8分08秒

広大な神域全体を詳細に撮っている。千本鳥居のあの独特の雰囲気の中で何か変わった狙いをするかなと期待したが、さらりと終ってしまった。作者の写歴は古く超ベテラン。最近ハイビジョンに転向されてからの作品は更に進歩めざましく、優れた作品を次々に出されている。今後の作品が楽しみ。

15. DD51のある風景 (ハイビジョン)

前田茂夫さん 9分51秒

全線高架だが、わずか一日2往復、昼間3本、夜間に復路1本が走る貨物列車専用の城東貨物線。この間隔の開いた列車を追うのはひたすら待つことかも知れない。阪急電車との立体交差はタイミングよく上下を列車が通過したが、新幹線とはすこしタイミングがずれた。こういう情景が撮れる確立は5%もないのでは。シャッターのスイッチを入れたままカメラを線路の中央に置き、その真上を列車が通過するシーン。8ミリカメラでは私も二度ほど経験したがデリケートなハイビジョンカメラは私ならやらない。なにしろ振動がすごいから。

この前は人も行き交う赤川鉄橋の作品に感心したが、これは距離の長い区間。撮影場所を選ぶだけでも大変だったろうに。